

加越で金銅が採れた地  
・出雲の山川 川名入郡  
① 着が流れてきた  
② 持ち至 飯氏の跡か？

次々更  
698"-3/6  
14行



地<sup>ち</sup>曰<sup>い</sup>投馬<sup>とうま</sup>国<sup>こく</sup>に(設<sup>せつ</sup>馬<sup>ま</sup>国<sup>こく</sup>・殺<sup>ころ</sup>馬<sup>ま</sup>国<sup>こく</sup>)の<sup>ほう</sup>方<sup>ほう</sup>へ、時<sup>とき</sup>  
折<sup>お</sup>行<sup>ぎょう</sup>幸<sup>こう</sup>さ小<sup>こ</sup>たの<sup>だ</sup>らう。  
■<sup>■</sup>そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>一<sup>い</sup>た<sup>た</sup>際<sup>さい</sup>に、ハツクニシラス<sup>すめらみこと</sup>天<sup>あ</sup>皇<sup>みかど</sup>は、阿<sup>あ</sup>  
多<sup>た</sup>君<sup>きみ</sup>の妹<sup>いもうと</sup>の阿<sup>あ</sup>比<sup>ひ</sup>良<sup>ら</sup>比<sup>ひ</sup>売<sup>め</sup>(<sup>あひらつひめ</sup>吾<sup>あ</sup>平<sup>ひら</sup>津<sup>つ</sup>媛<sup>ひめ</sup>)を<sup>めと</sup>娶<sup>めと</sup>り  
妃<sup>み</sup>とさ小<sup>こ</sup>たの<sup>か</sup>も知<sup>し</sup>小<sup>こ</sup>ない。  
\*  
■<sup>■</sup>で<sup>で</sup>は、阿<sup>あ</sup>多<sup>た</sup>君<sup>きみ</sup>の<sup>いづい</sup>出<sup>で</sup>自<sup>じ</sup>を<sup>とく</sup>特<sup>とく</sup>定<sup>てい</sup>ト<sup>トル</sup>ル<sup>と</sup>出<sup>で</sup>来<sup>き</sup>  
る<sup>の</sup>だ<sup>ら</sup>う<sup>か</sup>。  
・そ<sup>そ</sup>小<sup>こ</sup>は<sup>な</sup>な<sup>か</sup>な<sup>か</sup>難<sup>むづか</sup>しい<sup>が</sup>、あ<sup>あ</sup>え<sup>て</sup>求<sup>もと</sup>める  
と、  
阿<sup>あ</sup>多<sup>た</sup>君<sup>きみ</sup>は、扶<sup>ふ</sup>余<sup>よ</sup>系<sup>けい</sup>殷<sup>いん</sup>民<sup>みん</sup>の<sup>い</sup>子<sup>こ</sup>孫<sup>そん</sup>だ<sup>た</sup>の<sup>で</sup>  
は<sup>な</sup>か<sup>ら</sup>う<sup>か</sup>✓  
と<sup>おも</sup>わ<sup>れ</sup>る。  
■<sup>■</sup>何<sup>なに</sup>故<sup>ゆ</sup>か。  
・倭<sup>わ</sup>人<sup>じん</sup>で<sup>は</sup>な<sup>さ</sup>さ<sup>う</sup>だ。  
いた<sup>は</sup>よう<sup>で</sup>あ<sup>る</sup>(後<sup>ご</sup>述<sup>じゆつ</sup>)  
・口<sup>くち</sup>箸<sup>しよ</sup>を<sup>もち</sup>用<sup>もち</sup>い<sup>て</sup>食<sup>しょく</sup>事<sup>じ</sup>一<sup>い</sup>た<sup>と</sup>解<sup>かい</sup>さ<sup>れ</sup>る。  
(古<sup>こ</sup>事<sup>じ</sup>記<sup>き</sup>へ<sup>は</sup>須<sup>す</sup>佐<sup>さ</sup>之<sup>の</sup>男<sup>おとこ</sup>命<sup>みこと</sup>の<sup>た</sup>大<sup>おほ</sup>蛇<sup>へび</sup>退<sup>たい</sup>治<sup>ち</sup>系<sup>けい</sup>参<sup>さん</sup>  
照<sup>てう</sup>)

次頁末行



「侯遠呂智」とあり

④  $133 - \frac{3}{3}$   
(表6)

記(出) 93-94  
 記(入) 原 239 700 - 4/9

④ 698<sup>n</sup>-3/314<sup>n</sup> のま 野間山 加世界  
 12140<sup>+</sup>, 141723

11.30 (初) 左時 前頁 13<sup>行</sup>

の 彌生<sup>やよいじん</sup>人の子孫<sup>しそん</sup>でもあまゝい。  
 ・ 縄文<sup>じょうもんじん</sup>人の子孫<sup>しそん</sup>、南方<sup>なんぽう</sup>系<sup>けい</sup>長身<sup>ちやうしんじん</sup>人の子孫<sup>しそん</sup>、  
 ・ 箕子<sup>きし</sup>の子孫<sup>しそん</sup>とは考えにく<sup>い</sup>い。

上推察される。へ  
 第6表へ大山津見の系譜（想像）参照  
 へ阿多君は、  
 余系殷民の子孫であつたろう  
 へ阿多君は、  
 余系殷民の子孫であつたろう

端部はぼぼ真西の方へ向かつて  
 は、<sup>カ</sup>立狭碕<sup>ミ</sup><sub>ミ</sub>（今の野間岬）があり、その先に  
 薩摩半島西海岸の加世田の南西約一〇キロに

とく  
突出  
一  
て  
い  
る  
。

因みに述べると、  
 古事記へ天孫降臨条に、  
 本采は随分後代の

こう記され  
て  
11  
3。  
(天照大神の孫)  
あまてらすおほみかみ  
まこと

天孫<sup>てんそん</sup>邇<sup>に</sup>邇<sup>に</sup>芸<sup>ぎ</sup>命<sup>のみこと</sup> Ⅱ この物語では仁徳<sup>にんとく</sup>天皇と

神かみの女むすめ、名なは神阿多都かむあたつ比売ひめ（亦またの名なは木花このはなえ）

佐久夜毗売  
と一夜婚  
ひさ小た  
L

とある。  
↑↑↑↑↑  
↑<sup>5</sup><sub>12</sub> ②  
第6表 大山津見の系譜  
お目やまの  
の系譜  
参照

古事記 八須佐元男命の大蛇退治条

前頁 20 行



西698<sup>p-1/6</sup> 西688<sup>p-4/10</sup> 「吾田名」地名年922<sup>上</sup> 記(国)54<sup>上</sup> 臣  
2行 阿多 臣長 " "

700<sup>p-5/9</sup>

記(国)54<sup>上</sup> 記原文(年)224

「おほやまつみのかみ」  
大山津見神は、  
山<sup>やま</sup>の神<sup>かみ</sup>に  
あたるに  
行<sup>い</sup>であ

また  
と  
呼ば  
れ  
て  
い  
た  
と  
解  
さ  
れ  
る。  
と  
呼  
ば  
れ  
る  
と  
説  
示  
さ  
れ  
て  
い  
る。  
（「古事記」新潮日本古  
典集成、五四頁注一参照）  
薩摩半島南西端「阿多」の君長であつた阿多  
多君は、倭人達から、  
「国つ神」  
（土着神）  
と  
呼  
ば  
れ  
る  
と  
説  
示  
さ  
れ  
て  
い  
る。  
（「古事記」新潮日本古  
典集成、五四頁注一参照）  
な  
お、  
高天の原系の神は、  
天つ神と称さる  
こ  
れ  
に  
対  
し  
て、  
土着性を  
も  
つ  
神  
は、  
国つ神  
と  
呼  
ば  
れ  
る  
と  
説  
示  
さ  
れ  
て  
い  
る。  
（「古事記」新潮日本古  
典集成、五四頁注一参照）

に、  
「僕」は、  
国つ神大山津見神の子。  
わが名  
は足名稚といひ、  
妻が名は手名稚といひ、  
女  
か  
名  
は  
櫛  
名  
田  
比  
売  
と  
い  
ふ  
と  
あ  
る。  
（\*手足の長い長身人であつたことを示唆しているのたう  
とある）  
国つ神大山津見神の子足名稚は、  
何等かの  
理由によつて笠狭碕から追放され、  
やむなく  
現在の出雲国の山奥に住んでいたのでなからう  
か。  
（追つて詳述。  
第6表へ大山津見  
の系譜参照）



紀上141°59' 宇治谷上51°

大きな「ウ」

紀上154°89' 大蛇のこ

とこうで 698°-6%

700°-6/9

おそろくあつめ-2/5

扶桑年表民加 地名辞922° 武カで軍人もはかめ千つイ①H18.5.10②

そうじう 総合 1286°

り、加世田市の山間部で多く祀られている  
という。ハ「古事記」新潮日本古典集成、九四

頁注一参照

ここのこと等を総合しての判断なので

なからうか「久米博士は、『歴史地理』巻四

第九号において、

「吾田君は、すなわち大山津見にて、熊襲

軍人の君長なり」

と述べている。(「帝国地名辞典」太田為三

郎、名著出版、九二二頁へ高千穂二上峯)参照

ドル

「吾田君が軍人の軍を統率」たのぞう

と思われ

トル

書第二には、神代紀(下)第九段一

と記されて

「吾田木花開耶姫」が父大山祇神在り

第五段本文には

「吾田木花開耶姫」は是、天神が大山祇

神を娶つて

生ませた子で



北緯 90° 海神  
 北緯 558° 海神 常陸 豊玉彦神子

69° - 7/2 91°  
 700° - 7/9

北緯 558° 海神 常陸 豊玉彦神子

とあり、大山祇神の性別が分らない。  
 本来、大山祇神（吾田君）は男なのであろうか。  
 今日山の神は女だ。とする伝承と、意図して、混同されているの  
 かも知れない。  
 木広くよく知られている通り、山の神は  
 自分の妻の卑称である。（「広辞苑」）山の  
 神（参照）  
 ともあれ、薩摩半島南西部から西方（東台）  
 の方向へ向かって突出している笠狭崎（今  
 の野間岬）あたりには、大山祇神（山の神）  
 が祀られている。

\*

博多湾の北の境界を形成しつつ、西の方（東）  
 へ、九州北部の「志賀島」で「祭祀」され  
 対比して考えられる「綿津見神」（海神）  
 ところて何と、山祇神（山の神）と常に



⑨ 948P-2/2  
種名を特定するの  
むづかしい

ともみ 飯 10斤

金印

志賀海神社  
順子さんが来られてた

橋

700' - 8/9

紀上 90° 海神  
紀上 558' 綿津見神  
明治 538'

注 91° 笠沙御前  
1109 (明治) 948' 大かみ  
87 1326

紀上 95° 阿墨連 結三神  
紀上 558' 注 63  
皇太子 紀上 169° 海の底へ行く

治の方角へ向かって細長く伸びる「海の中」  
道の先に「志賀島」はあって「綿津見神」の子孫である  
阿曇氏が「志賀海神社」の神職として綿津見神  
(海神)を祭っているという「日本書紀」(上)  
日本古典文学大系、岩波書店、五五八頁、補  
注一六三。「日本社寺大観」名著刊行会  
へ「志賀海神社」参照  
水なお、冬期の西北方からの強風を避ける為  
であらうか。  
「志賀海神社」は、志賀島の南東域部に  
にある。「志賀島の金印」岡本顕實、栄光  
印刷(株)、十二頁参照)  
⑧  
④ ようするに「  
① 九州の南端に「大山祇神」(山の神)を配  
し、  
② 九州の北部に「綿津見神」(海の神)を配



700<sup>円</sup> 9/9

い

HV

置ち

と

も

神

お

て

い

う

に

い

る

こ

と

つ

い

下

か

分

は

は

る

か

る

山

の

の

大

山

祇

手

の

神

の

か

の

の

お

の

の

の

の

お

の

の

の

の

お

の

の

の

の

お

の

の

の

の

お

の

の

の

の

お

の

の

の

の

お

の

の

の

の

お

の

の

の

の

お

の

の

の

の

お

の

の

の

の

お

の

の

の

の

お

の

の

の

の

お

の

の

の

の

お

の

の

の



あぐね かしと  
遺 阿久根市協本 901-3/5 P-1/6  
井 大カ 2247 17斤 701-1/6

後見の母のT大 15川内 紀上142°  
25 1097  
紀上143° 11

に於て 前頁10斤

九州南半部にある陵墓

九州南半部の陵墓を、ごく簡単にみてみよう。

神代紀(第九段本文の末尾に、

筑紫日向可愛の山陵に葬りまつる。因りて

と記載されてゐる。  
延喜諸陵式に、

紀上142° 9斤

日向、埃山陵。天津彦彦火瓊瓊杵尊。在

日向国。無二陵戸ニ

とある。

●陵墓要覧は、

市 51°

「鹿児島県川内市宮内町字協園」  
を遺称地とする。

●「か」宮崎県延岡市北方の可愛岳を遺

称地とする説もある。

という。(「日本書記」(上)日本古典文学大系  
岩波書店、一四三頁注十一参照)



赤色の歴史地図

あいら 781P  
→ 5932P にXモした

紀上168P

鹿児島県 肝属郡 15Pに別記

紀上168P 肝属郡内神郷北方村

とある 698P-3/3

多分 900P-5/5

5724P 107 紀上185P 5724P 107  
山

701P 2/6

おそろく、記の筋書き上、  
天の國から降った瓊杵尊の御陵  
は、日向（九州の南半部）に築かれた  
と述べる必要があったのだろう。  
瓊杵尊の子の彦火火出見尊（神武天皇の  
祖父）は、日向の高屋山上陵に葬られた、と  
さしづけいえる。（紀）  
神代三山陵志（白尾国柱著）は、  
「鹿児島県肝属郡内之浦郷北方村、国見嶽の巔」  
とする。（「鹿児島県の歴史」原口虎雄、山川出版社、十五頁参照）  
しかし、「陵墓要覧」には、  
「鹿児島県始良郡溝辺村大字麓字菅ノ口（鹿  
見島湾北岸域）」  
とある。（「日本書紀」上）日本古典文学大系、岩波書店、一六八頁注四参照）  
瓊杵尊の孫の鳥嶋草葺不合尊は、大隅半  
島の吾平山上陵に葬られた、という。  
「陵墓要覧」には、  
「鹿児島県肝属郡吾平町大字上名（洞窟）」  
と記されている。（「日本書紀」上）日本古典文学大系、岩波書店、一八五頁注二参照）  
志布志湾西岸の肝属平野最南端部に、吾平  
山上陵がある。武妻山中の洞窟を思い起させる。  
すでに述べた通り、この一帯には、高塚式古



数又改頁末  
紀上 596° 注1)

ようすに ④ 699° 1/2 14行  
紀上 188°  
4行 ④ 698° 3/4 末2行

701° - 3/6

紀上 140° 11行末  
④ 698° 5/6  
4行 ④ 696° 1/10  
④ 696° 7/10

大和朝廷に楯突き、頑強に抵抗した。

④ 九州南部地域に住む異民族曰熊襲は、

④ それなのに、記紀中の後文において、

と述べている。

た

③ とある記紀は、

九州南部こそ、我が国発祥の地であつ

た。

② また、

天神降臨から神武天皇の東征開始まで、

一七九萬二千四百七十余年経過した。

という。(神武即位前紀参照)

① 記紀に

天神瓊杵命は、天上の国「高天原」が

日向国の高千穂峯に天降り、笠狭碕(通常

薩摩半島西岸の野間岬と解されている)へ到

つた。

と記されている。

第177 190 図。第七章「地下式横穴」(参照)

第303 墳、地下式横穴が多数築かれたのだった。

それはそうと、なんとも奇妙な点がある。

\*



と、書きこるされたのだろう

敵対していた

熊襲は、大和朝廷に従おうとせず、頑に

た地であったにもかかわらず、後年の記紀

九州南部地域は、倭国発展の足掛りとな

⑥ だが

三―四参照

本古典文学大系、岩波書店、五七七頁、補注

とする見解を提示した。(「日本書紀」(上)日

環と「工作」されたものである

神武天皇東征説話は「神代物語」の構想の一

と疑問視し、

ろうかとして皇室の発祥地であり得たのだ

いた僻陬(かたいなか)の地ヒムカ(日向)

「後世まで逆賊巨熊襲の占拠地となつて

へ入ったという記紀の説話」について、

⑤ 津田左右吉氏は「神武天皇がヒムカからヤマト

学大系、岩波書店、五九六頁、補注七一―一参照

怪訝に思われる。(「日本書紀」(上)日本古典文

かのように記載されており、――其だ以って



利軍仲哀隆  
赤12年神功皇后  
奇妙44

286P-5/6  
286P-5/6  
701P-5/6

286P-5/6  
286P-5/6  
701P-5/6

701P-5/6

逆に 逆賊 前頁6行

と察せられ3。  
⑦ 実ば、  
日向倭国(北九州・山口地方)と、東の  
日向倭国(中国・近畿地方)とが対峙して  
いた。  
という本来の歴史を、そのとおりに  
にいかず、およそ一八〇度反対に  
南の日向倭国(大和政権)とおよび地域と、  
た。南の日向倭国(熊襲国)とが敵対して  
と、単純に置き換えて述べているだけなのでは  
なからうか(第一巻31頁)因東西二つの文化圏の対立(参照)  
⑧ 補足すると、  
九州を征討する時の前進基地とされ、いた  
という。(「日本書紀」上)日本古典文学大系  
岩波書店、二八七頁、注三の参照  
⑨ とはいえ、すんなりと納得し難い。  
(1) 魏志倭人伝によると、  
九年前後の頃、すでに、  
邪馬台国に都を置く



前7行、180°反対に

敵国  
前7行

701<sup>P</sup>-6/6

多

倭人達は、九州北辺沿いの国々を属国としていた。例えは末盧国（松浦郡）・伊都国（怡土郡）・奴国（博多あた）  
（宇美や香椎）等の国々を属国としていた。と、いう。（第3表参照）  
仲哀紀や神功皇后紀には、日檀日比（香椎）をはいめとする北九州地域への巡幸記事が、多数掲載されていゝ。⑩従つて、周芳の娑婆が九州征討の際の前進基地とされた理由が分らない。  
⑪たぶん、倭奴国（東の中国・近畿地方の国）との国境に近い娑婆（山口県佐波）の地が、倭奴国（東方の強敵国）を征討する際の前進基地とされていたのだろう。と思われる。（第十一章「仲哀天皇」・第十二章「神功皇后」において詳述）

(\*)



現在「通常」  
 九州南半部の熊襲（球磨・贈於）の国は、かたくなに大和政権と敵対しあっていたから、長らくの間この地の人々の文化程度は低かった  
 と解さ小ていける。『日本書紀』上日本古典文学大系、岩波書店、五九六頁、補注七一十一「熊襲・蝦夷」他参照  
 だが、九州南東部一帯に築かれた「倭人達との関連性を強く示唆する」地下式横穴や日高塚式古墳などについて、まだ納得のいく解釈がなされていらないようである。  
 この物語では、次のような経過を考えてみた。  
 (1) 関越の東治から東遷し、箕子達の百余国中の極南界（八代・宇土地方）に倭奴国を創建した当時の倭人達が、何処にどのような墓を作っていたのか、現時点では分かっていない。

・熊襲南端の墓  
 ・川内のも墓

「た」が多いが「て」とは、



・もーかーたら倭人達は「武夷山の崖墓と同様」  
人里から離れた山奥の崖の割れ目を墓所と  
し、棺を入れて葬つていたのだろうか。  
\*但し、現在のところ確証は全く無い。  
(2) やがて倭人達は、関越あたりの地勢と同  
く、東方に大海原が広がっている「九州南  
東部一帯に」地下式横穴を築き、  
「~~地下に掘り下げた通路~~」を通つて亡骸を玄室  
内へ運び入れるようになったのであろう。  
「~~垂直の穴を崖に見たてた~~」  
(3) 垂仁二十八年 垂仁天皇の同母弟「倭彦」(何  
代目かの垂仁天皇か)が薨じた時、殉死が始  
まった。(第一表参照)  
・あるいはこの頃、一、箕子達の葬法を一部  
取り入れ、日高塚式古墳、墳丘に横穴を掘  
り、羨道と玄室を設けた墳墓」を作らうに  
なつたのかも知れない。  
(4) とはいえ倭人達は、~~「~~高塚式古墳~~」~~  
それ以降も、日高塚式古墳のみならす「昔  
からの伝統的な」地下式横穴にも築き続けた。



702<sup>1</sup>-3/6 外ハ ㊦ 1193<sup>1</sup>-1/2  
㊦ 1194<sup>1</sup> 中

という推移が想像される。

㊦

■

中国には、

大分 2254<sup>1</sup>

江南に生き、

邙山

ハ

洛陽北方の山。

第6。

ク因参照

に葬られるのか、

最高の幸せし

という言い伝えがある。

(「朝日新聞」昭和

五十五年十月二十三

日

付ハ

黄河行

参照。

第十四

章ハ香山、

そして

邙山

の頂において詳述)

■

倭人

達

の中でも

特に

往古から

の伝説を重

ん

人

ら

は

九州

南東

郡域

に葬

られる

のが、

最高

の幸

せ

世

と

思

っ

て

いた

死

んだ

後、

祖先

らの

霊魂

と共に

過

した

と

いう

強い

願

望

を

持

っ

て

いた

と

いう

強い

願

望

を

持

っ

て

いた

と

いう

強い

願

望

を

持

っ

て

いた

よう

\*



柳ヶ谷全部トハ

# [参考三]

倭国の領土、北へ広がる

あ1111°

▽ 所産好国の

407°N

台頭」と

①128-2/3

②105°-1/2

466

後40°の距離

22

702°-4/6

大町の領

■前180年頃、殷の王族箕子の末裔である箕子(マコ)が、九州・山口地方を奪って『海中の王』となった当時には、箕子一族の者達の数は微々たるものだった。と考えられる。(第3表参照)

■だがその後、朝鮮半島北部に残してきた箕子の親族などの一部が渡来したであろうし、……また、年を追うごとに、箕子の子孫達は増えていったことだろう。

■南韓・北九州・山口地方に百余国を置いて統治する箕子達の天下は、次第に確固たるものとなっていたに相異ない。

■なお、箕子達が死んだ時には、甕棺(カメガハ)などに葬られたのである。第三章「甕棺墓」(第3表参照) 他において既述

●徐々にながら、……本抛地(福岡・佐賀県)以外の所で、甕棺葬が行なわれるようになっていったものと思われ。大町の甕棺(第3表参照)

■とはいえ、箕子達がその領有域の極南界である八代・宇土地方を自ら統治していたのは、前180年頃から以降、七・八十年ばかりの極めて短い期間だったのではなからうか。(第3表参照)

●あるいは、

『前九十七年に『ハツクニシラス天皇』(崇神天皇)が極南

宇土・八代地方の特異性について

「小野小町」26〜29から転写して下さい。

180  
97  
83



界の八代・宇土地方を切り取って即位された時には、未だこの地方に甕棺墓の葬法が行なわれていなかった》

ということなのかも知れない。

■考古学的に見るとき、宇土半島基部あたりは、特に、非常に興味深いところとして知られている。

まず注目されるのは、北九州独特の甕棺墓の分布である。

「甕棺墓は、大形の甕の中に遺体を埋葬する葬法で、福岡平野を中心としており、——緑川や宇土半島基部以北でしかみられない」

という。「新・熊本の歴史」(1)熊本日日新聞社、一八六頁参照 第三章「甕棺墓」(既述)

《緑川以南の八代・宇土地方では、甕棺葬が行なわれなかつた》

■その後、倭人達の国『倭の奴国』と箕子達の国との境界線は、しばらくの間《緑川流域》あたりにあったのだから、そうしたわけで、緑川流域以南の倭人の国で甕棺墓が作られることはなかったが、……一方、緑川以北の箕子達の国では、箕子の血を引く者達の人口も増大し、甕棺墓が

盛行していった、と推察される。

・因みに述べると、

「上益城郡の御船町・嘉島町六嘉の二帯、下益城郡の城南町、熊本市の渡鹿台地・小碓原台地、更に白川北岸の合志町の広い台地に濃密な甕棺群の存在が知られている」

という。「新・熊本の歴史」(1)熊本日日新聞社、二〇九頁参照

・もしかしたら、

《箕子達が、倭人達の北上をくいとめる爲、緑川近傍一帯に強大な軍団を置いていた》

ということを示唆しているのかも知れない。

■往古の墓制の 一つに支石墓がある。支石墓というのは、素掘りの土壇墓・石を箱形に組んだ石棺墓・甕棺墓などの上に、小さな支石で支えられた大きな上石を乗せるもので、上石は長さ三以幅一以ほどの大きさのものもある。

・そして、この支石墓もまた、西北九州を中心として東は山口県の西海岸に分布し、熊本では緑川より北でのみ見られるという。「新・熊本の歴史」(1)熊本日日新聞社、一八四頁参照

■さらに、弥生式土器のうち、北九州と共通な形式の弥生

お689 小沢市吉塚・竈穴墓が四。例以上検生

お692 山口県 例以上検生

お692 山口県 例以上検生

お692 山口県 例以上検生

お692 山口県 例以上検生

お692 山口県 例以上検生

お692 山口県 例以上検生

新や(2)107 頁 注記  
人吉から石炭の産出が認められる  
綾羅木駅附近にも山口半島の西端にある。

お692 山口県 例以上検生

お692 山口県 例以上検生



重なり合つて5段後 16行  
重ねて描く 2段 9行

こと

次第

702 P-6

宇土とてつて708-6 2行

由692-1/11  
10行 同又

由688-9/12  
九州南端より3.5km中支  
の土器

由691-2/5  
19行

前期・中期の土器も又「この宇土半島でとま  
つてゐる。」「まぼろしの邪馬台国」宮崎康  
平、講談社、二五六―七頁参照）  
一方、弥生中期の黒髪式土器は、緑川の南・北  
両地域をおおひ、北は龍田山南麓の黒髪を経  
て筑後川河口に達し、南は人吉盆地でも見ら  
れる。という。」「まぼろしの邪馬台国」宮崎康平  
講談社、二三二―三頁、二五七頁参照）  
観察するところ  
へ箕子達の国の文化である北九州一帯に共  
通な土器は、宇土半島基部以南に入り得なか  
つたが、―――――か、次第に勢力を  
強大なものとしていった倭奴国の文化である  
黒髪式土器は、弥生中期（紀元前後）も一か  
いたる倭国大乱直前のことであらうか）のこ  
ろ、緑川以南のみにとどまらず、龍田山南麓  
の黒髪や筑後川河口を含む一帯に於ても用い  
らるようになつてゐた。

な、黒髪式土器の出土分布は、第136図へ免田式土器  
の分布と似通つてゐるように見てとれる。  
1802  
254  
5676  
7086  
107



78P  
前文で②としたい  
こを②としたい

703P-1  
天つき改行

はアキ

を望む 臨む  
古代の日本(3)九州 78P

九州全土中、四世紀の古墳が見られる地域  
①玄海灘に臨む筑前・肥前地方の沿岸部と  
②周防灘および別府湾に面する豊前・豊後地  
③最近古式の古墳が見え、にわか注  
目を集めている熊本県宇土半島基部地域  
をあげることができ。(「古代の日本」(3)  
九州、鏡山猛・田村圓登、角川書店、昭和四十  
五年二月発行、七八頁、第196表「熊本県宇土地  
主要古墳分布図」第197図「熊本県における首長墓の要図」参照  
参考文献は、次の通りである。  
①「新・熊本の歴史」(2)古代下、熊本日日新  
聞社、昭和五十四年二月発行。  
②「古代の日本」(3)九州、鏡山猛・田村圓登、  
角川書店、昭和四十五年二月発行、七八―八三頁。



コクヨ ケー20 20×20  
ルビ<sup>n</sup>金(



山(二一八)中腹の標高一五〇の  
尾根上に、二つの前方後円墳、  
日置鉢山古墳が見出しされた。  
・迫ノ上古墳の内部調査において、  
積みみの堅穴式石室が確認された。  
(2)その東方裾の丘陵には、三角縁神獣鏡を伴  
出した、三世紀末ころ築造の城ノ越古  
墳(宇土市栗崎町、前方後円墳)がある。(3)  
一四四二頁。④一〇八・九頁に詳述)  
(3)さらに、不知火海を望む宇土郡不知火町亀  
崎(松橋)駅の西方二(四)の丘陵上、海抜四〇  
トには、堅穴式石室を有する前方後円墳、弁  
天山古墳が築かれており、墳丘には古式の  
土師器や壺形埴輪があった。  
代にさかのぼると考えられている。  
■そこで、  
今熊本県宇土半島基部地域は、筑前・肥前  
地方、豊前・豊後地方と並らび、  
初期の高塚式古墳が築  
かれたところである。✓  
として注視されている。



703<sup>p</sup> - 4/7

成人用か? (鑑子)

HV

|   |      |     |     |   |   |   |   |   |
|---|------|-----|-----|---|---|---|---|---|
| ト | 第196 | 197 | 198 | M | M | M | 図 | ② |
| ハ | 〇    | ハ   | 一   | 頁 | 参 | 照 |   | 1 |
| な | お    | 玉   | 名   | 市 | 山 | 部 | 田 | 発 |
| 方 | 後    | 内   | 墳   | も | 四 | 世 | 紀 | の |
| 船 | 形    | 石   | 棺   | の | す | ば | に | 古 |
| も | つ    | 二   | 個   | の | 合 | 口 | 壺 | 棺 |
| と | い    | う   | 。   | ② | 一 | ハ | 一 | 頁 |
| ・ | 倭    | 人   | に   | 仕 | え | て | い | た |
| し | て    | 大   | 形   | の | 合 | 口 | 壺 | 棺 |
| か | 。    |     |     |   |   |   |   |   |

\*

703<sup>p</sup> - 5/10

703<sup>p</sup> - 6/10

703<sup>p</sup> - 7/10

703<sup>p</sup> - 8/10

703<sup>p</sup> - 9/10

703<sup>p</sup> - 10/10

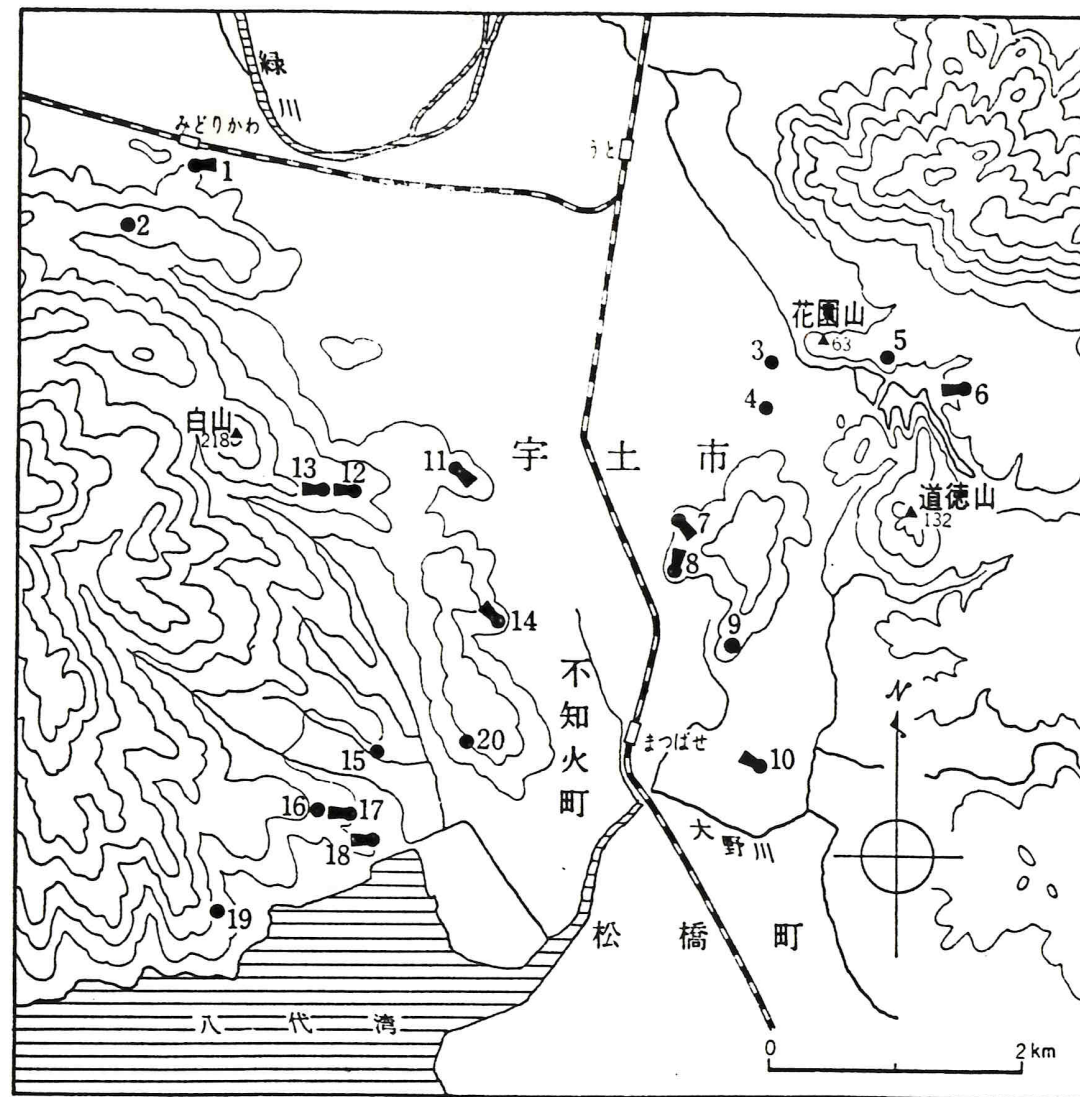
次頁の表



\*左頁上に転したい。

703<sup>P</sup>-5/7

- 1 天神山古墳
- 2 神ノ木山古墳
- 3 古保里石棺
- 4 神ノ山古墳
- 5 橋崎古墳
- 6 夫婦塚古墳
- 7 茶臼山古墳
- 8 向野田古墳
- 9 岡岳古墳
- 10 松橋大塚古墳
- 11 城ノ越古墳
- 12 迫ノ上古墳
- 13 播鉢山古墳
- 14 二王塚古墳
- 15 鴨籠古墳
- 16 道免古墳
- 17 国越古墳
- 18 弁天山古墳
- 19 桂原古墳
- 20 塚原古墳



1409 第196図 熊本県宇土地方主要古墳分布図

伊勢水道 ⑤ 722<sup>P</sup>  
松葉の瀬戸 ⑤ 729<sup>P</sup> ⑤ 730<sup>P</sup>  
かすはら古墳  
⑤ 3012-13/14  
(松葉の瀬戸)

1309 『古代の日本』3九州、角川書店、80頁参照  
473



・右頁上半分、限定一杯左右はみ出して掲載下さい。

703P-6/9

HIV

| 年代  | 時期区分 | 関川流域 |    | 菊池川下流域 |          | 菊池川中流域   |      |     |     |     | 白川上流域 | 緑川中流域 |    | 宇土半島基部 |      |    |      | 氷川下流域 |    | 球磨川下流域 | 球磨川中流域 | 天草島嶼域 |    |
|-----|------|------|----|--------|----------|----------|------|-----|-----|-----|-------|-------|----|--------|------|----|------|-------|----|--------|--------|-------|----|
|     |      | 右岸   | 左岸 | 右岸     | 左岸下手     | 左岸上手     | 左岸下手 | 岩野川 | 右岸  | 合志川 |       | 菊池    | 御船 | 城南     | 轟・緑川 | 花園 | 松山松橋 | 不知火西  | 右岸 |        |        |       | 左岸 |
| 300 | 前期   | 前葉   |    |        |          |          |      |     |     |     |       |       |    |        |      |    |      |       |    |        |        |       |    |
|     |      | 中葉   |    |        |          |          |      |     | 竜王山 |     |       |       |    |        |      |    |      |       |    |        |        |       |    |
|     |      | 後葉   |    |        | 藤光寺 (85) | 大塚 (100) |      |     |     |     |       |       |    |        |      |    |      |       |    |        |        |       |    |
| 350 | 中期   | 前葉   |    |        |          |          |      |     |     |     |       |       |    |        |      |    |      |       |    |        |        |       |    |
|     |      | 中葉   |    |        |          |          |      |     |     |     |       |       |    |        |      |    |      |       |    |        |        |       |    |
|     |      | 後葉   |    |        |          |          |      |     |     |     |       |       |    |        |      |    |      |       |    |        |        |       |    |
| 400 | 中期   | 前葉   |    |        |          |          |      |     |     |     |       |       |    |        |      |    |      |       |    |        |        |       |    |
|     |      | 中葉   |    |        |          |          |      |     |     |     |       |       |    |        |      |    |      |       |    |        |        |       |    |
|     |      | 後葉   |    |        |          |          |      |     |     |     |       |       |    |        |      |    |      |       |    |        |        |       |    |
| 450 | 中期   | 前葉   |    |        |          |          |      |     |     |     |       |       |    |        |      |    |      |       |    |        |        |       |    |
|     |      | 中葉   |    |        |          |          |      |     |     |     |       |       |    |        |      |    |      |       |    |        |        |       |    |
|     |      | 後葉   |    |        |          |          |      |     |     |     |       |       |    |        |      |    |      |       |    |        |        |       |    |
| 500 | 後期   | 前葉   |    |        |          |          |      |     |     |     |       |       |    |        |      |    |      |       |    |        |        |       |    |
|     |      | 中葉   |    |        |          |          |      |     |     |     |       |       |    |        |      |    |      |       |    |        |        |       |    |
|     |      | 後葉   |    |        |          |          |      |     |     |     |       |       |    |        |      |    |      |       |    |        |        |       |    |
| 550 | 後期   | 前葉   |    |        |          |          |      |     |     |     |       |       |    |        |      |    |      |       |    |        |        |       |    |
|     |      | 中葉   |    |        |          |          |      |     |     |     |       |       |    |        |      |    |      |       |    |        |        |       |    |
|     |      | 後葉   |    |        |          |          |      |     |     |     |       |       |    |        |      |    |      |       |    |        |        |       |    |
| 600 | 終末期  | 前葉   |    |        |          |          |      |     |     |     |       |       |    |        |      |    |      |       |    |        |        |       |    |
|     |      | 中葉   |    |        |          |          |      |     |     |     |       |       |    |        |      |    |      |       |    |        |        |       |    |
|     |      | 後葉   |    |        |          |          |      |     |     |     |       |       |    |        |      |    |      |       |    |        |        |       |    |
| 650 | 終末期  | 前葉   |    |        |          |          |      |     |     |     |       |       |    |        |      |    |      |       |    |        |        |       |    |
|     |      | 中葉   |    |        |          |          |      |     |     |     |       |       |    |        |      |    |      |       |    |        |        |       |    |
|     |      | 後葉   |    |        |          |          |      |     |     |     |       |       |    |        |      |    |      |       |    |        |        |       |    |

1429 第197 図 熊本県における首長墓の変遷

1329

『新宇土市史』通史編第一巻、宇土市、平成15年3月発行、440頁参照。



女一丁



1429

- 1364

1264

6/10/94 09 11am  
④ 1933P 104  
E10 中源城 析万收 在  
析中4) - 132P 右下



宇土市の南東約四時<sup>まつばせ</sup>日松橋町<sup>まつばせ</sup>近傍<sup>きんぼう</sup>にも  
 多数<sup>たすう</sup>の古墳<sup>こふん</sup>が築<sup>きず</sup>かれた。  
 松橋町<sup>まつばせ</sup>には、現存<sup>げんぞん</sup>の高塚古墳<sup>たかづかこふん</sup>十六基<sup>き</sup>、畑地<sup>はたち</sup>  
 にする為<sup>ため</sup>の開墾<sup>かいけん</sup>その他の理由<sup>りゆう</sup>で既に消滅<sup>しょうめつ</sup>した  
 もの八基<sup>はつき</sup>の計<sup>けい</sup>二十四基<sup>にじゅうよんき</sup>があった。  
 一か<sup>い</sup>し、記録<sup>きらく</sup>や記憶<sup>きおく</sup>に残<sup>のこ</sup>って<sup>のこ</sup>いないものま  
 で加<sup>くわ</sup>えると、三<sup>さん</sup>の基<sup>き</sup>近<sup>ちか</sup>くの古墳<sup>こふん</sup>が存<sup>ぞん</sup>在<sup>ざい</sup>して  
 たと推定<sup>すいてい</sup>されて<sup>い</sup>いる。  
 という<sup>い</sup>

(\*)



用七造字  
④  $138^{\circ}-7$   
⑤  $138^{\circ}-7/2$

八元

八代地方の古墳

八代地方にも、注目すべき古墳が多い。

八代郡竜北町の野津古墳群は、尾根上に築かれた前方後円墳群である。

「北から、姫ノ城古墳・群中最大の中城・古墳・端ノ城古墳などの古墳が、前方部を北に、南北に主軸をおき並んでいる。

また、中ノ城古墳の北西の尾根には、西に前方部をもつ物見櫓古墳があり、他の消滅したもの等も合わせると、総数十数基の一大古墳群」といふ。

(第198図の50・52・53・51・71)

八六一九三頁参照

姫ノ城古墳について、少々詳しく述べ

てみよう。

姫ノ城古墳は、ミカン園として手が加えられているが、全長八五、前方部の幅五〇、後円部直径四五、大古墳で、前方部の幅が後円部径より広く、一かも前方部(高さ九、後円部(高さ七)より発達した古墳時代の後期の姿を示す。







頁の全面に、限度一杯  
はみ出し掲載下さい



（せんどう）  
・ 墓道の奥に、前室  
おびき玄室入口が見える  
（せん）  
← 奥の入口が見えるように  
おいて下さい。

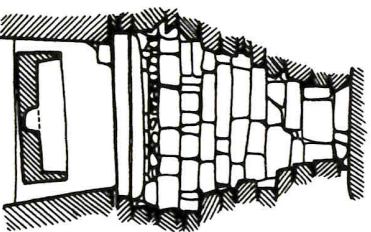
移動

と下げろ

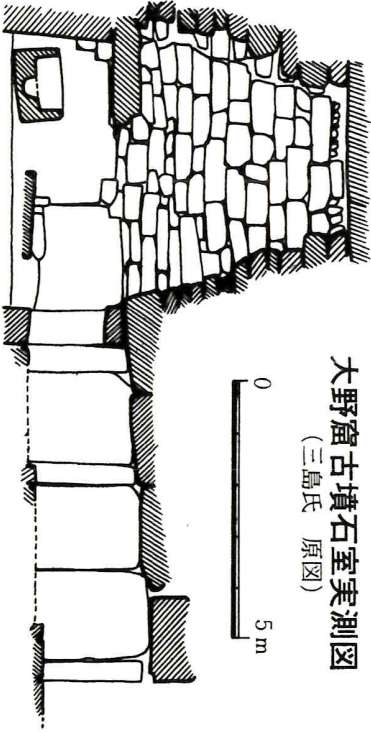
大野窟古墳石室実測図

(三島氏 原図)

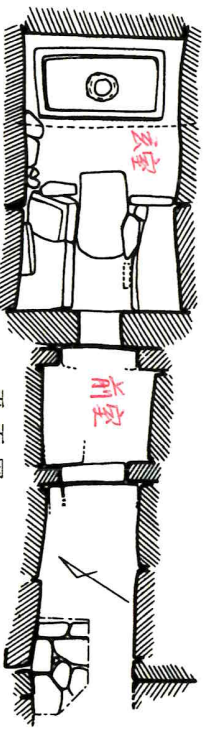
0 5 m



横断面図



縦断面図



平面図

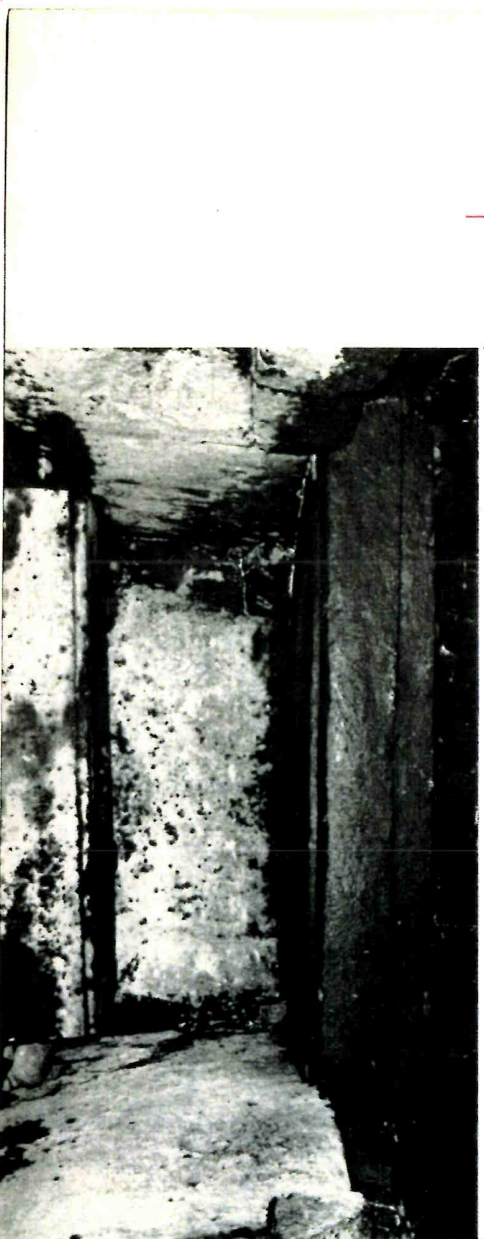
と下げろ

移動

707 P

479

17.0m  
井上虎雄  
100.0m  
100.0m  
100.0m



厚真図版 168 大野窟古墳

12.04

14.04

上の写真: 大野窟古墳羨道。下: 大野窟古墳玄室の奥壁 (上に石棚、その下に石棺  
あり)

『熊本県装飾古墳』松本雅明、熊本日日新聞社、昭和51年3月発行、189頁参照。



ミ

大カワ 1186°  
楯 吳ミビ  
ヒハ  
ノキ  
ミ

708P

能本の裝飾古墳 188P  
大 円錐、円錐台

測り

あり

大カワ 238° 596°  
前 吳ミビ  
空 吳ミビ  
室 吳ミビ  
全 吳ミビ  
新 吳ミビ

・盛土の中央部からはすれて構築された内部主体は、  
複室（前室）を備えた切石積の大きな横穴式  
石墳で、いわゆる巨石積と呼ぶのにふさわし  
い。  
・石室全長十二・四メートルを測り、西南に開口部  
がある。  
・玄室（奥室）の床面は長方形で、その上方  
には、四角錐台状の空間が、持送り式に形成  
されていいる。  
・玄室内最奥の壁に石棚があってその下に家  
形石棺を配置し、玄室内前室寄りの西隅角部  
に障壁で区画した二つの死床をもつ。  
・家形石棺の蓋はなくなっている。  
・前室はほぼ正方形。羨道は平面視長方形で  
ある。  
・羨道の門の楣石（梁石）の下には、石製の  
扉があったと伝えられている。  
・この古墳が、日装飾古墳であることがわか  
るのは、近年のことである。  
・戦時中の陸軍・見学者・孝浪者らの焚火

257頁を  
原本を  
はかり

ミ



(\*)

によつて、壁面も天井も黒変しており、描かれていた文様の図柄についての判断は、今のところ、全く絶望的である。  
\*赤外線撮影してみよう。  
模様の痕跡は、次の部位に認められる。  
(1)羨道 北1・2石と南1・2・3石の顔料は赤色。  
(2)前室 南北5・6石の顔料は白・赤色。  
(3)奥壁石と両側壁、および石棚の前縁の彩色による装飾であるが、顔料はいずれも不明。  
(4)石棺には鉄丹が塗布されており、文様とはたらどうだろうか。朝日新聞「令和二年八月十一日付夕刊八面参照」  
大野窟古墳は、石室の構造・大きさ・高さの点において九州最大で、日本でも屈指のものである。  
遺物に土師器・須恵器などがあり、須恵器の大形器台は重要視されている。  
この古墳の造営年代は、六世紀の中頃であろう。  
という。(7)一八八〜九頁参照



709<sup>P</sup>-3/2

西方百田遺跡  
西元園田遺跡

5頁に多数の古墳名あり

704<sup>P</sup>-4

端ノ城古墳・物見櫓古墳など  
野津古墳群  
姫ノ城古墳  
中ノ城古墳  
や大野窟古墳  
式古墳は、単  
高塚式古墳は、単  
一帯の高塚式古墳は、単  
付近一帯の高塚式古墳は、単  
なる一地方豪族のものとは思えない。  
また、形象埴輪も、他地域に比べて八代地  
方に濃く分布している。  
という指摘がある。  
(8) 一二頁参照